

特集

林業とエネルギーの明日を考える

岩手県住田町の挑戦

東日本大震災は、沿岸部にあった木材加工・流通施設の津波浸水など、主に東北3県の林業・木材産業にも大きな被害をもたらした。一方、原発事故によるエネルギー問題への感心の高まりも受け、木質バイオマスを中心としたエネルギー供給体制の構築への動きが高まっている。林業を基幹産業に据え、震災後は木材を利用した仮設住宅を建設、木質バイオマスの活用も進める岩手県住田町の取り組みを追った。



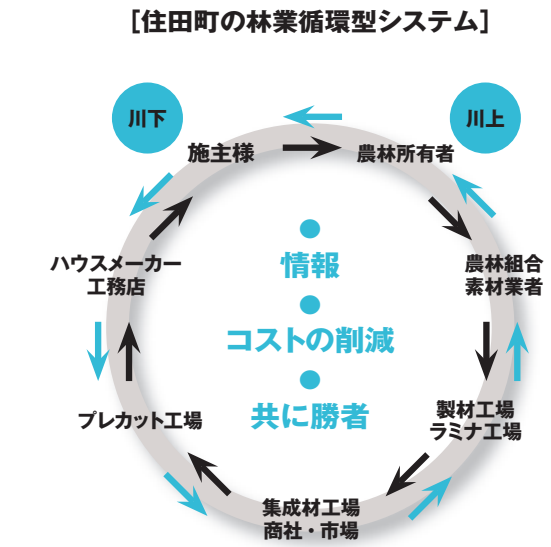
需要が頭打ちの
林業と
木質バイオマス
活用への取り組み

岩手県住田町は町面積の約9割にあたる3万ヘクタールが森林で、豊富な森林資源を誇る。人口約6千人の地域経済は、林業を中心に回っているという。「林業をとりまく産業は裾野が広く、雇用効果は極めて高い」



三陸木材高次加工行動組合の中川代表理事

カット工場に必要な大きさや形に裁断した建材を、住宅メーカーや工務店等に出荷する。いつもの過程を経て産物が形成されるため、その規模は最終売上の5倍にも及ぶという。この一大産業を地元で確立すべく、住田町は昭和57年に第3セクターとして住田町の林業循環型システムを構築した。



ために一定規模の需要を必要とする。そのうえ、海外からの輸入木材によりコスト競争は激化。「生産性向上やコスト削減の経営努力により、利益を創出している」と前出の中川さんが語る背景には、震災前からの厳しい業界環境が見て取れる。こうした中で国が押し進

り、林野庁も昨年「地域材供給倍増事業」として木質バイオマスの利用拡大の取り組みを支援している。今年7月には再生エネルギー買取法も成立し、木質バイオマス発電に注目が集まってきた。

住田町で木材の伐採業を営んでいる松田林業。住田町は内陸部にあるため津波被害は免れたものの、その事業には大きな影響を受けた。岩手県では、県内木材生産量のうち約3割が合板用材として宮古市・大船渡市の合板工場3カ所に供給されていたが、これらの工場が津波被害により操業を停止、合板用材の流通が滞った。また製材工場については71カ所が被災、11年12月現在で31カ所の製材工場が操業を停止している(平成23年度版「森林・林業白書」より)。松田林業の取引先も陸前高田などの沿岸部にあり、多くが再建を断念したことから売上は3/4割ダウン。「時間が経つにつれ、ボディーブローのようにきてきた」と取締役の松田昇さんは言う。そこで注目したのが、木

事業者

未活用木材を集めて
エネルギー資源へ
「資源も風潮もある。
活用先の拡大を」

有限会社松田林業 取締役
松田昇さん

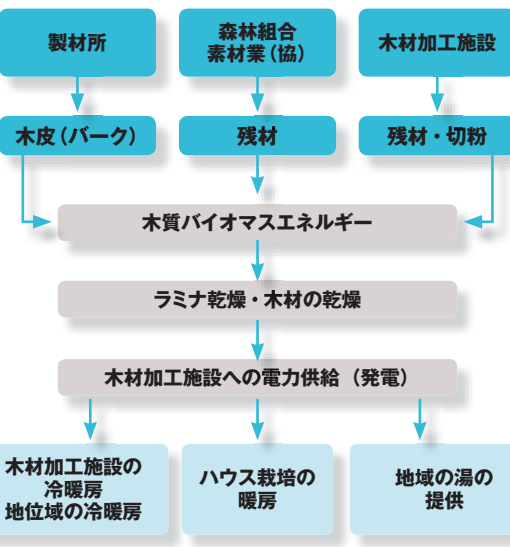


質バイオマスだ。震災後の住田町は、木材加工施設を集めて木質バイオマスエネルギーを資源として活用する動きが加速している。木質バイオマスエネルギーは、木材加工施設で発生する「残材」や「切粉」を乾燥してペレットに加工し、家庭用暖房や発電に利用する。住田町では、木材加工施設で発生する「残材」や「切粉」を乾燥してペレットに加工し、家庭用暖房や発電に利用する。住田町では、木材加工施設で発生する「残材」や「切粉」を乾燥してペレットに加工し、家庭用暖房や発電に利用する。

質バイオマスだ。「震災後のエネルギークライシスで腹をくくりました」と語る松田さんは、未活用の森林資源を集めて木質バイオマス発電へ活用する取り組みを開始した。木材はその品質により、主に家の柱などに使われるA材、ベニヤや集成材などに加工されるB材、端材となるC、D材に分けられる。一般的に収入に繋がらず、文字通り「山に捨てられたまま」だったC、D材を山から町中へ運び、エネルギー源とするために乾燥・保管している。



【木質バイオマス利用可能性フローチャート】



後、町の木を使って木造の仮設住宅を93棟建設。結露が出にくいなどの効果もあるという、町のPR資源として昨年多くの県外の展示会などで発表の機会があったと言う。後述の森林保全団体「more trees」との提携が仮設住宅へのペレットストーブ提供へとつながった通り、町外とのつながりによる可能性の広がり大きい。「ペレットストーブによりペレット需要は伸びています。成長分野として期待したい」と伊藤さんの言葉の通りとなるか、今後に注目したい。

興支援プロジェクト「Life311」を立ち上げ、林業が盛んだった岩手県住田町の支援を開始。現在のところ、住田町の木材を使った仮設住宅の建設費約1億2000万円、木質燃料のペレットを利用するペレットストーブ90台を提供した。目的は地域経済の活性化にある。ストーブは1台20万円と高額だが、燃料となる木質ペレットの価格は灯油と大差ない。さらに現地の木材から生成されたペレットを利用すれば、エネルギーの地産地消にも貢献でき、さらに地域経済の循環に寄与できると考えた。



NPO
90台の
ペレットストーブを提供
「地元の木材がエネルギーに
なることを知ってもらいたい」

一般社団法人
more trees 事務局長
水谷伸吉さん

も担う。

昨年3月には、震災の復興



住田町で配給されたペレットストーブ

震災で、勉強する場所を奪われた子どもたちに、学びの場を

被災地の放課後学校「コラボ・スクール」

photo by yasuko furukawa

復興が急ピッチで進む中でも、津波で家や塾を流され、学習環境の悪化した子どもたちが、被災地には残されています。

コラボ・スクールとは、被災地の子どもたちに学習指導を行う放課後の学校です。被災が特に激しかった、宮城県女川町(女川向学館)と岩手県大槌町(大槌臨学舎)で、小中学生を対象に学習指導を行っています。

ご寄付のお願い

コラボ・スクールの授業料は無料。学校の運営費用は、全国の皆様からいただいた寄付で賄わせていただいています。「勉強したいけど、学ぶ機会がない・・・」そんな子どもたちのために、1万円のご寄付で1人の子どもの1ヶ月学校に通えます。ぜひご支援をよろしくお願いいたします。

ご寄付の詳細・お申込

特定非営利活動法人 NPO カタリバ
TEL: 03-5327-5667 Web: http://www.katariba.net/collabo

生徒の声

向学館ができて、落ち着いて勉強することができるようになりました。ここで勉強したことを通じて、これまでやっていただいていたお店やお祭りを復活させる力になればと思います！(中学2年生)

被災した直後は、勉強などできる状況ではありませんでしたが、今では向学館できちんと勉強できています。特に、ボランティアの方が個別で指導してくださるので、苦手の教科もだんだんと分かるようになってきました。(中学3年生)

ふくしまで何が起きているのか
ふくしまから何を学ぶべきか。

ふくしま復興学へ

【東京サテライト(立教大学・泡盛キャンパス)での聴講について】
福島大学行政政策学類政策学研究室 Tel.024154808253
当該の内容に関する URL: http://www.wads.fukushima-u.ac.jp/category/satellite



復興プロダクト

8



空色刺し子織りスリッパ
中川政七商店

と、福島県の刺し子織りの三和織物が出会ったのは数年前。「ミュージアムショッ

「日本の伝統工芸を元気にする!」とのビジョンを掲げる奈良の中川政七商店

大きく広がる空の青

織っていくので、とても手間暇がかかる技法だ。三和織物は被災し一時工房を離

布地に補強や保湿効果を与えるために糸で刺し縫いを施す、東北で盛んだった「刺し子」。それを機械織りに応用した「刺し子織り」は、生地に模様を刺しながら

手紙を書いたことが始まりです」と中川政七商店の杉浦さん。それから、多くの商品を共に生み出してきた。

プで見つけた、とても魅力的な生地が刺し子織りでした。三和織物さんに直接お

問い合わせ <http://www.yu-nakagawa.co.jp>

のお願いが込められている。空色刺し子織りスリッパ 3500円(税抜)／中川政七商店

そんな中、中川政七商店が始めた、売上げの一部で被災地に桜の木を植える「春をとどけようプロジェクト」に参加した。三和織物が織り上げたのは、空色の生地。青空と白い雲を連

れたが、今は戻り「仕事ができることが嬉しい」と意欲的に仕事を再開している。



1基1日450株

陸前高田市に突如現れる真っ白いドーム。グランバファームが展開するこの先端植物工場では、8月よりレタスの出荷を開始している。

完成した新蔵での

新たな酒造り

陸前高田市・酔仙の「雪つこ」、10月出荷を目指す

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市の酔仙(すいせん)酒造。その新蔵が、震災から約1年5ヶ月を経て、この8月、隣接する大船渡市にオープンした。酔仙酒造では、昨年夏から一関市にある醸造施設を借り受け、製造を再開していた。国の補助金等を受けて、今年3月からは新蔵建設を開始、今回の完成にこぎつけた。

「オープンしたのはものの、部屋の使い方や、新しく導入した機械の動かし方など、覚える事や微調整がまだまだ残っている。慣れるまでは大変」と、酔仙酒造の金野泰明さんはオープン後の今を語る。とはいえ、従業員が陸前高田や大船渡から内陸まで車に乗り合わせ通っていた頃と比較すれば、仕事場はぐっと身近になった。

酔仙ではまず、自慢「雪つこ」の仕込みを開始。今年10月の出荷を目指す。10月以降は、震災前の7割程度の品目にはなるが、「雪つこ」以外のお酒の仕込みに着手する予定だ。

新蔵は大船渡に完成したが、今後は地元、陸前高田への復帰も目指している。事務所や倉庫等は陸前高田市内に設置し、今まで通り「陸前高田市の酔仙酒造」として操業を続けていく方針だという。金野さんは、「本場にこの1年半近くは、あつという間だった。多くの方のご支援をいただき、誰が見ても立派な工場ができた。この新しい立派



酔仙酒造の新工場／大船渡市猪川町

な蔵に恥じないように、またお世話になった人に感謝の気持ちを伝えられるようにやっていきたい」と静かにこれからの決意を語った。新しい蔵で生まれた酔仙のお酒を楽しめる日を、心待ちにしたい。

編集後記

兵庫県にある県立舞子高校を訪ねる機会をいただいた。こは全国で唯一、環境防災科を設置し、通常、高校で履修する単位の3分の1を防災教育に充てている。

カリキュラムが素晴らしい。熱意ある先生に支えられ、多彩な観点から社会の防災力を上げるにはどうすればよいかを学ぶ。地学の教師が、地震や台風のメカニズムを教え、英語教師が海外の防災事情を原文を読み解き、また多くの外部講師が現場で培った知恵を語る。消防署の訓練を体験し、地元の避難訓練でリーダーを務め、お年寄りに消火器の使い方を教えることもある。

驚嘆したのは生徒達の発言だ。自分で考え、発表することを訓練されているので、何を聞いても自分の答えが返ってくる。この学校を志望した理由や将来の夢はもちろん、障害者の防災についてや社会に対する市民の参加意識をどうすれば上げられるかなど、大人が問われても窮するような質問に、我れ先に手を挙げて答えていく。

この学校で何を学んだか?との問いに、ひとりの女子生徒が「生きていることの素晴らしさです」と答えた。命は尊い、だから守る。知識や実践だけでなく、ちゃんと生きていく上で大切なことを学んでいる。自らの高校時代を顧み、軽い敗北感すら感じ帰京した。(T)

「知る」という支援がある。

東北復興新聞の制作・印刷・発送は、皆様からの協賛で支えられています。「よきことを、よき人へ」伝えるために。どうぞご支援をお願いします。

■お申し込み方法

- Web : <http://www.rise-tohoku.jp/>
- Eメール : assist@h-u-g.jp
- FAX : 03-6869-0151

MENU

1 東北復興新聞サポーター 【8,000円/年】

毎号2部をお届けします。(ご友人・同僚の方にも)

2 東北復興新聞パートナー 【30,000円/月】

毎号100部をお届けします。(会社の皆様でどうぞ)